海外文化研修に参加して

中田　達也

海外文化研修には，「英語の能力を高めること」「異文化を学ぶこと」という二つの側面があると思われる。ここでは，その二つの大きな要素について私が何を学んだか，ということを書いてみたい。

前列左から２番目が筆者

１）「英語の運用能力を高めること」について

私はこの海外文化研修に参加して，英語の学習は机上で勉強して完結するものではない，と強く感じた。他人とコミュニケーションをとる手段として活用して，初めてそれを学ぶ意味が出てくるのだ。今までリスニングが出来ればいい，リーディングが出来ればいい，と思っていた私にとって，それは英語を学習する新たな意味を与えてくれた。つまり，今まで自分にインプットして蓄積してきた知識をアウトプットする，という作業のことである。

ただ，数週間アメリカに行ったからといって，語彙力や文法力が飛躍的に向上する，ということはありえない。海外文化研修に期待できるのは，そのアウトプットを実践する場が与えられる，ということだけだ。英語を読んだり聞いたりすることは，貯金にたとえられる。今まで読んだり聴いたりしたことのない言葉は，当然自分の口からは出てこない。依然，リスニングとリーディングという地道なインプットの作業は必要なのである。

そんなアウトプットを実践するのに最適な場に約四週間いて，私が学んだことは「積極性」の一語に尽きる。どんな発音であれ，文法であれ，とにかく自分の意思を伝えたい，という気持ちを強く持つことだ。発音を例に挙げれば，英語にあって日本語にない音は20以上もある。それらの音は日常日本語をしゃべっている以上使わないのだ

から，我々の舌や唇はその音を出すことに慣れていない。英語のネイティブスピーカーにとって，我々日本人の話す英語は甚だ聞き取りがたいものに違いない。日本人に完璧な英語をしゃべることなど出来ないのだ。

しかし，例えば我々がRとLを正しく区別できないとしても，それで誤解が起こることはきわめてまれであるそうだ。たいていの場合，文脈で判断してくれる。ここで，先ほど挙げた「積極性」が問われるのである。日本人に完璧な英語がしゃべれないということは，裏を返せば，日本人は日本人の英語をしゃべっていい，ということでもある。日本人の英語で，いかに自分の考えを伝えようと努力するか。何もコミュニケーションの手段は言語だけではないのである。ジェスチャーや，表情や，声のピッチやトーンをいかに駆使して意思表示をするか。言語については，そんなことを学んだ。

2）「異文化を学ぶこと」について

私は夏休み中にある戯曲を原書で読まなければいけない事情があって，その戯曲をミネソタに持っていった。しかし，たとえ辞書を引いて日本語に翻訳できたとしても，その言葉の本当の意味や，どうしてこういう状況でそのようなことを言うのか，判らないことがよくあった。そんな時私は，ホストファミリーや先生に，「この台詞はどういう意味で言っているのか」と尋ねることにしていた。

私にとっては，それこそが「異文化を学ぶこと」であった。英米人がその言葉を聞いた時に，心の中に連想するある共通のものがある。背後に隠れている文化的背景が言葉に微妙なニュアンスを加え，サブテキストとして機能する。つまり，言葉を理解するためには，その言葉の背後にある文化的背景を理解することが欠かせないのだ。言葉を学ぶことは文化を学ぶことと切り離しては成り立たない，ということを実感した。

最後に，あまりここでは触れられなかったが，ミネソタの人たちと言葉や文化の壁を越えて交流できたことも大きな収穫であった。しかし，言葉や文化が違う人々と一緒に楽しく時を過ごすことが出来たからといって，それで世界中の人々はみな必ず互いに理解し合える，と結論を出してしまうのは早計ではないか。

私はミネソタを発った後，メアリーランドに移住した親戚の家を訪ねた。今まで少なからず偏見にあってきたこと，そして第二次大戦中の日本人の強制収容所についての話を聞いた。そして，彼らは私をスミソニアン・ミュージアムに連れていってくれた。そこで私が見たものは，“Hidden History of Kovno Ghetto”と題された，ナチスに迫害された—国籍や文化が違う，というそれだけでのことで迫害された—ユダヤ人たちの悲劇だった。言葉や文化

の違いがあっても，それを必ず乗り越えられる，と確信して少しはしゃいでいた私に，彼らはあえて見せたかったのかもしれない。悲しいけれど，それも目をつぶってはいけない現実だった。私は楽しかった旅の最後に，もし自分が日本からのゲストという立場で来ていなかったら，と思わずにはいられなかった。

（なかた　たつや
本学文学部英米文学科１年）